OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	現代歴史観の展望
Author(s)	牧, 健二
Citation	懐徳. 1931, 9, p. 109-136
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88839
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

現代歴史觀の展望

牧　健　二　述

（堂友會員　藤塚誠二速記）

一

歴史の研究は深く考へれば考へる程疑問を生ずるもので、自分の現在やつて居る研究が、果して歴史の事實に合致したものであるかといふことが、第一疑問になつて來るし、假令又事實に相違ないとしても、果してそのやうな研究が何程の價値をもつたものであるかといふことに就て、屢々考へさせられる。私は早くよりこの種の疑問を抱いて居たが、近時に至つて益その度を深めた。さうして幾度か深刻な煩悶となつて私を苦めた。新聞紙の記事などに書いてある所を見ても、甚だ屢々明かに間違つたことが事實として傳へられて居る。所が後世になると、歴史家はこの新聞紙などを根本史料として、昔こんな事があつたと歴史を書くのである。若しその史料の價値を飽くまで吟味するならば、歴史といふものは書けないことになる。且又今日歴史家が普通に研究して居る所を見ても、それが現代人に役に立ちさうにもないことが大部分を占めてゐる。歴史といふものは勿論、直ぐ樣現代に役立たしむるがために研究されるのではないが、併しながら偶々珍らしい一つの材料を得たとか、或はその歴史家の特殊の興味によつて書かれて居る所を見ると、そんな事を研究したつて、何程人生に觸れたも

のであるか、何程文化の發達を明かならしむるものであるかといふことが、疑はれざるを得ない場合が多い。斯くの如き反省は歴史家の仕事をして、殆ど根本的に幽鬱ならしむるが如き反省である。恐らくこれは歴史家に於て特に見るやうな、煩悶の種であらうと思ふ。

哲學者などにあつては、彼の思惟を廻らすことによつて進むのであるから、比較的外部的な材料によつて拘束を受くることが乏しい。事物の正しき認識と論理とを追うて眞直ぐに進めばよいのである。一般の社會科學に於ても、材料は主として現代の者で、之を理論的に整理することが學問となつてゐる。自然科學にあつては實驗が容されるから、その研究が正確に行はれる點に於て、到底歴史家などの想像の出來ない學問上の餘裕がある。然るに歴史家にあつては一にも二にも過去の材料によつて拘束せられる。假令四圍の事情から推論して、斯うでなければならないと想定したことでも、正確な材料が出て來ない以上は、歴史事實だと斷定するわけにはいかない。而もその材料たるや、先程言つた新聞紙の記事に見るが如くに、果して何程信用を置くべきものか、究極の所に至ると多くは疑問である。否事實そのものを傳へた史料などといふが如きものは、事實に關する原物を存する場合の外は、多くの場合に於て見當らない位である。況んやもつと大きな歴史學の困難は、如何なる歴史事實でも、複雜に周圍の他の事實と結びついて居るといふことである。嘗て林子平は『海國兵談』に、隅田川を流るゝ水は英吉利のテームス河に通ふ、と言つた。その言葉は當時鎖國日本の狹い眼を有する日本人

の間に於ては、さすがに廣やかな經世家らしい言ひ廻し方があつたが、一般に凡ての歴史事實といふものは、全くこれと同樣に言ひうべきもので、私が今客と對話をして居るといふその事實は、正しく今ロンドンで英國の首相が、何をして居るかといふことゝ、全然無關係ではないのである。一つの現在の事實が古今に亘つて關係を保ち、東西に及んで連絡をもつて居るといふことは、如何なる歴史事實に於ても見る所であつて、この複雜極まりなき關係と連絡とをよく考慮に入れない時は、歴史といふものがわからない。然るに限られたる人智を以て、どうしてこの無限的な複雜な歴史の構造を知り盡すことが出來やうか。歴史家は眞面目に自分の仕事を考へたならば、煩悶せざるを得ない。恐らくその最後に至るまで、絕わず自分の仕事の完成せざることを悲むのが、歴史家に與へられた、免れざる運命ではないだらうか。

そこで歴史家の中に二種類を生ずる。普通の歴史家は茲に言つたやうな問題には、餘り疑問を起さないで、只管事實の研究に沒頭する。それが果して愈々疑ひなき事實であるかといふ點に就ては、甚だ注意を拂ふが、そんな事を、左樣な方法で研究したつて、結局廣く歴史を知り、文化を明かならしむる上に何程の價値があるかといふことに就ては、深く考へて見ない。又假令考へたにしても突き詰めた所まで反省して見ない。兎も角確實な史料によつて、並に自己の常識的な判斷によつて歴史事實を書く。これは普通の歴史家に見る所である。然るに一度前述の如き反省と煩悶とを經過する時には、

或は匙を投げ出して歴史家たることをやめるか、或は最早何事もよい加減に思うて此の「職業」を繼續するか、さもなければ新たに生きて行く道、即ち歴史家としての更生の活路を考へざるを得ない。そこで第二種の歴史家にあつては、歴史觀といふものに就て考へる。歴史とは何ぞや。これは苟も古來覺醒した歴史家と稱せられたものが、必ずや一度は考へて見た問題に相違ない。覺醒のある歴史家である以上は。必ずや、歴史とは斯くの如きものなりとの、一個定まつた見識を胸に抱いて、それによつて歴史の事實と其價値とを判斷する。進んではこれを綜合して、統一ある全體の歴史の研究と敍述とを試みる筈である。斯様に二種の歴史家が存在するのであるが、從來現はれた歴史家の爲すところを見るに、一人にして兩者に卓越することは容易の業ではない。事實の研究に沒頭する歴史家は、考證に於て正確であるけれども、歴史の全過程から見て餘り役に立たぬことに努力を勞費する。歴史全體に於ける自己の研究の位置といふものを、よく理解しない傾きがある。これに反して歴史觀に目覺めた歴史家の爲す所は、自己の研究の價値を反省することには敏であるが、餘りに潔癖であつて、仕事がはかどらないことも少くなく、或は彼の主觀に捉はれて、事實の研究を粗略にする嫌ひがある。それ故この二種の歴史家の態度は兎角調和し難い。偉大なる歴史家ともいふべきものは、この二種の態度が一人に合致したものであるべき筈なのである。何れか一方に偏する時には、その程度に應じて誤りを生ずる。

そこで歴史觀に就いていへば、之れが歴史研究に於て大切なものだといふことゝ同時に、又その歴史觀が人をして誤らしめ易いものだといふことも明かである。實に歴史の本質に對する判斷は、古來幾度か變遷した。甲の歴史觀が現はれて一度榮ゐたかと思ふと、乙の歴史觀が現はれてこれに代る。續いて丙丁の歴史觀が現はれる。それ等が或は對立して爭ひ、或は一世を風靡して獨裁的地位を保つた。殊に注意すべきは時代の大きな變遷が、歴史觀の大きな變化を促したことである。蓋しこれは當然なことで、大きな世の變り目には、人々は歴史の變遷を大きく摑むことが出來るわけで、そこで歴史とは何ぞやといふことが、比較的はつきりと眼前に現はれて來るのである。併しながらそれはその時眼に映じたものであつて、やはり時代的な影響の下に立つものであるから、これをしかと捉へた如く考へた哲學者や歴史家などは、假令その時、これこそ永久的な歴史觀だと思つて居ても、後になると永久性のないものであることが暴露される。現在の世界並に日本の狀態の如きも、何人にも正しく時代の大きな變遷期に在ると言ふ感念を起さしめる。從つて人々は比較的大きく廣く歴史を眺める時代に遭遇して居る。歐洲大戰の頃から、甚だ屢々『歴史的』事件といふ言葉が、新聞紙上などにも見ゐるやうになつた。今日の流行語で言へば、現代を『展望』すると言ふ態度が、殊に顯著になつて來た。そこで近來は歴史觀といふものが、哲學者にも、科學者にも、又歴史家にも反省せられる大きな問題となつて來た。この事は實に興味の深いことである。歴史家に取つては、彼の仕事の根柢を反省

せしめられる大きな問題が、眼前に横はつて居るのである。繰返して言ふが、これは歴史觀の歴史から言へば、一つの注意すべき反省と變化との行はれ得べき時期なのである。それ故に今日歴史觀といふものが、人々の注目する大問題となつて來たのである。

さて歴史觀の正しき考へ方は、歴史の正しき認識に據るべきものであるから、歴史家こそは實は歴史觀を考へ得る最も有力な候補者であるべき筈である。古來の哲學者が歴史觀を論じ、近來では經濟學者が歴史觀を說くのが流行となつて居るけれども、學問の對象から見ると、何れも歴史の理解を直に自家の本分としてゐる者ではない。常に歴史を研究の對象としてゐる歴史家こそは、歴史觀を正當に認識し得べき準備を有する者であるべく、又眞に歴史家となる爲には之を有することが必要である。然るに歴史家が却つて哲學者や經濟學者などに引づられて居るのは、歴史家にそれだけの見識がないのだと言へばそれまでゞあるが、屢々それは餘りに酷評でもある。歴史家がよく歴史といふものを考へて見ないことも勿論原因であるが、歴史家は歴史が餘りに複雜なものだといふことをよく知つて居るので、哲學者や科學者の如くに、簡單に言つてのけることが出來ないのである。然らば今日の歴史家として此處に更に反省を加へ、歴史觀を考へるとなると、如何なるものが容さるべき歴史觀であるか。この事は歴史家が自己の扱つてゐる歴史の本質を質し、歴史研究の性質を反省する時には、必ずや何か思ひあたる所のものがあるべき筈だ。そして勿論斯くの如き歴史觀の研究は、それ自體甚だ價

値のあるものである。歴史の研究にとりては固より、一般的に社會科學の研究のために重要であることは、更に言ふまでもないことである。

二

何が歴史であるかといふことに就ては、歴史を知る人の智識の程度に應じて一定しない。次第にこれを知ることが深くなるに從つて見解が異つて來る。先づ最も幼稚な狀態では、歴史は個別の『事件』だとして眼に映ずる。即ち某年某月某所に某々政治家の會合が行はれたとか、又は甲國と丙國とが戰爭をしたとか、其他何事にあれ色々な事件が歴史で、それを正確に知ることが歴史の研究だと思はれる。小學校で敎ふる歴史の如きはこの種のものであつて、仁德天皇の三ヶ年間免租の御事績とか、和氣清麿が道鏡に恐れず國體を守つた忠誠とか、乃木大將の殉死とかいふが如くに、偉人英雄の爲した著名な行績について物語ることが、歴史を聞かせることとになつて居る。それ等の偉人の行つたところの間には、歴史的に聯絡といふものがないのではないが、小學生には個々の事件が個々の事件として現はれ、事件以外に歴史はないのだ。あるとすれば歴史の敎訓があるのみである。

然るに稍進んで來ると、事實との間に聯絡があり、事件と事件との間には關係があることが、判然として知られて來る。玆に歴史が『沿革』あるものとして考へられる。即ち或る有力なる例へば藤原氏とか、源氏とかいふ名門の盛衰、或は支那に於て見るやうな王朝の興亡といふが如きものを眺めて見

ることになる。歷史は流れるものである、動くものである、消長するものであると考へる。固より氏族や國家の盛衰興亡のみならず、國民の精神とか、各種の藝術とか、學問とか、あらゆる文化的の現象は、或は興り或は衰へ或は盛へ、或は亡ぶ、その消長變化の間に歷史があると見る。即ち歷史を波動に譬へて、その波の高まる時と、底に落ちて低まる時とを考へて、色々形容詞が生み出される。實に歷史と言へば沿革を意味し、國民の經歷がその國民の歷史であるといふやうに考へるのは。歷史に對する普通の觀方なのである。これは固より歷史を事件と見る觀方よりも進步したもので、事件を小學生の歷史認識だとすると、これは中學上級生以上のそれだと言へるが、古來歷史といふたものゝ中心觀念は、この沿革といふ點にあつて、歷史といふ言葉は經歷といふ觀念を基礎にして居るのである。

然るに更に深く進むと、歷史の硏究は到底個々の事件を知り、其等の間の沿革を原ねるのみでは滿足出來ない。どうして斯ういふことになつたか、その根本の原因を知らなければ承知が出來ないことになる。即ち歷史の『因果』の存する所を明かにしなければ、歷史を眞に知つたものとは言へないことになつて來る。尤も事件を探り、沿革を源ねる以上は、誰でもその原因を何程か考へないではないが、歷史を知ることが廣く深くなるに從うて、益々根本的な原因は何かと言ふことに興味を覺ねることが多くなる。然るに愈々深くこれが原因は何であるかと押詰めて考へる段になると、歷史家と雖も案外のんきなものである。前に起つた事件、その事件があつたので、續いて後に或る事件が起つたと

すると、前の事件が原因で後の事件が結果であるといふやうに考へるのが普通であるけれども、併しながら果していつでもさういふやうなものであるか、それは單に事件の發展に過ぎないのではないか。例へば豊臣秀吉が日本國を平定した曉に朝鮮を征伐したことに就て、日本の諸大名の平定と統一とが、朝鮮征伐の原因であると言ひ得るか。即ち日本を平定し統一した結果、朝鮮を征伐したと言ひ得るか。直ちに疑問が起らざるを得ない。寧ろかう考へられぬか。朝鮮を征伐せしめた根本的な原因は、同時に日本をも平定し統一せしめた秀吉の手腕と、その當時の經濟的、文化的な各種の狀況とであつたのではないか。で日本を統一したといふことでは、朝鮮の征伐といふことの原因とはなつて來ない。朝鮮征伐の機會を準備しただけで、彼と此との間の關係はたゞ一個の發展に過ぎない。沿革に止まる。日本を平定し統一した力があつて、其の力が朝鮮征伐をも動かした原因となつたのである。斯の如きは見易い場合であるけれども、凡てこれに類した見當違ひが行はれ易い。歷史に於て何か原因かといふことは、屢々判斷に苦しむ所である。况や歷史を深く考察して飽くまで突き詰めて、原因の更に原因をと探つて行く時に、限りなくその奧があつて、遂に究極の原因を說くことが容易でないことになつて來る。併しそれは兎も角、原因を考へなければ、歷史の研究は完成しないと言はざるを得ない。

要するに歷史に對する觀方は、先づ最初に現はれた個別の事件といふものが眼につく。その次には事件と事件との間に聯絡があつて、古今に亘つてそれは沿革をなして居るものである。更に沿革の中

にも內面的の進路があるので、即ちそれは發展して居るものであるといふやうに考へるが、最後にその歷史の根柢にこれを動かす原因があつて、その原因によつて歷史が生じて居る。眼前に見ゐる事件は固より、移り行く沿革でも發展でも、それを動かす原因によつて出來た結果であると見ざるを得ないといふ所にまで到達する。事實より沿革に移り、沿革より因果に移る。さうして因果關係に關する考へ方は、歷史をよく反省すればする程、深刻とならざるを得ない。

然るに此處に一つの注意を要することは、歷史の認識が進めば進む程、着眼する局面が廣くなつて居ると言ふことで、歷史を事件だと見るならば、歷史はたゞ目まぐるしく變轉する浮世の有樣である。且又著名な人目をひくやうな事件のみが歷史であるが、進んで沿革を歷史だと見ると、或は一代を通じ、或は古今に亘つて、長き歷史の舞臺が眺められることになる。事件より狀態に移る。然るに更に進んで、歷史の原因と言ふことを、追々深く考へて來ることになると、歷史は漸次に簡單な原理によつて支配されてゐることが知られて來なければならぬ。そして其の原理は、ひとり著名な事件のみならず、平凡な日常生活をも支配するものであることが知られて來る。又一國民の歷史のみならず。廣く諸國民の歷史を支配してゐる原理にまでも溯らねば、歷史の原因と言ふものがよく判らないと言ふことになると、歷史の因果を見ると言ふ立場は、最も廣い觀方であつて、人生觀や世界觀に觸れて來ることが知られる。かやうに歷史の認識が昂まるにつれて着眼さるゝ局面は廣くなつて來る。所が研

究の材料から言ふと、著名な珍らしい事件に關する者が最も多いのに反して、人生觀や世界觀にもふれるやうな歷史の根本原因などと言ふものになつて來ると、文字にあらはれた者は殆んどないので、歷史家の判斷が之を決定するやうなことになつて來る。それならば、事件について語るのが最も正確で因果關係を說くのは最も危險であるかと言ふに、必ずしも左樣ではない。前にも言つたやうに、事件に關する史料には誤傳が多いので、よく之を吟味してゐると、事件の歷史は書けないことになるのだが、それが沿革となると、事件史ではあやしい所が修正され、修正されぬでも、遠望した歷史の輪廓は餘程無難な形で見られる。それが根本的な因果關係となつて來ると、只に古今の歷史に亘るのみではなく直接に吾等の生活にふれて來るから、却つて一箇の正確さを加へて來るのである。

三

歷史に關する右に述べた三種類の認識は次第にその程度を高めたものであるが、これに類した事實は、歷史記述法の發達史を眺めても認められる。この事は最も注意すべき點である。といふのは人類が歷史を書き始めた時には、それは先づ個々の事件として眼に映じた。事件と事件との間に、潛んでゐる聯絡といふものがよく考へられなかつた。即ち某年某月某日に某所に於て、如何なる事が行はれ、又他の年月に於て或る事件が生じたといふやうな工合に、事件の發現がたゞ事件の發現としてのみ書かれて、その間に發展と統一のあることがよく考へられなかつた。即ちその時分の歷史といふものは、

神話のやうな一段の物語であるとか、又は連絡のない單純な年代記の類であつて、これを取捨鹽梅して一つの統一ある歴史を見出し、思想的に纒つたものとして書くといふことは出來なかつた。古事記や日本書記の古い所を見ると、我が古代人の最も原始的な歴史觀が見られる。それによると、この世の出來事をあらはにごと(顯露事)といひ、その諸々の出來事は、常に神々の支配に屬して居る。即ち神々の意思によつてあらはにごとが現はれたのである。それ故にこれはかみごと(幽事)によつて成立して居るものであると考へて居た。斯くの如き時代に於ては、個々の事件が個々の事件としてのみ眼に映ずるのは、已むを得ないことであつた。蓋し事件は神の掌る所であるから、果して如何なる原因で、かくの如き始末となつたかといふことは、人智を以て知り得ない所である。原因を知り得ないのみならず、それ等の事件の間に聯絡を立てゝ考へるといふことが、實は出來ないことである。神の意思は略ば想像することは出來るが、これだと言つて摑まへることの出來ないものである。摑まへることの出來ない意思によつて生じた歴史事實であるから、どうしてもそれはぽつり〳〵とその時々の神慮の現はれを仰ぐ外に方法のないものである。即ち歴史と言ふのは事件の發現で、それは神慮の發現である。歴史學も亦『發現史』の形をとる。宗教的に神の絶對威力を信じて、神力によつて風雨が起り、山川が生れ、五穀が稔り、疾病が生ずるといふが如くに信じた時代には、歴史は發現史であるとしてのみ考へられた。勿論斯くの如き歴史は極めて幼稚な狀態であつて、各國の神話時代の歴史記述

の如きがこれに相當するものであるが、併しながらその後に至つても、歴史を沿革あるもの、發展史的なものだといふ認識を、十分完全に自覺するまでには、相當の年代を經たものである。年代史の古い形は、その過渡期に生れた。

次に歴史を沿革的なものと見るのは、これは歴史に對する從來行はれた普通の觀方であつて、又先にも言うたやうに、歴史といへば、沿革であるといふのが古來の考へ方であつた。然るにこの沿革的な觀方がよく成熟して一貫した發展と言ふ者を考へ出したのは、歴史に對する反省が生じた後であつて、その反省は一國の政治とか社會の、大きな變遷があつた後に現はれるのが通例である。さうしてその程度も次第に昂まつて來たのである。例へば我國では平安朝の末頃から、かやうな反省が昂まつて來て居る。それは王朝の政治が衰運に向ふたからであつて、大鏡が其先驅であるが、鎌倉時代に書かれた有名な愚管抄や、南北朝時代に於ける神皇正統記といふが如きものは、王朝時代が終つて武家時代が始まつたといふ大きな事實が、歴史を反省せしめる機會を作つた結果生じた産物である。愚管抄に於ては、歴史には道理が現はれる。即ち道理の發展史であると見られる。神皇正統記に於ては、日本は神國であると言つて、特種の國體を有する我が國家の沿革を書きつゝ、公家政治が武家政治となつたことの必然的な發展を認めて居る。即ち歴史は個々の事實の寄せ集めではなくて、前後一貫した精神ともいふべきものがあつて、それが發展して諸般の事實を貫いて居ると見るのである。

即ちこの觀方の下では、歷史は『發展史』である。或は國民の精神が發展して、その國特有の文學なり、藝術なり、政治なり、學問などを現出すると見る。或は或る種の文化が先づ起つて、それが時代の必要に應じて、次から次へと姿を變へて伸びて行くといふやうに考へる。例へば善人は榮え、惡人は亡ぶといふ原理が、歷史を一貫して存在して居ると見ることによつて、一國の歷史を書くことが出來る。或は自由の精神が野蠻未開の時代から、徐々に現はれて、それが政治を支配し、經濟に現はるゝことによつて、遂には近代の歐洲の文明を形造つたと見ることが出來る。或は武士道が源平時代の武士の生活に胚胎して、それが鎌倉武士の道德となり、その後一時は衰へたが、併しその間に一種の訓練を經て、德川時代になつて、儒敎思想などの感化の下に陶冶せられて、遂に麗はしき我國に於ける獨特なる、武士階級の道德をなすに至つたと見るが如き、如何なる方面に於ても發展史といふものが書かれる。固より經濟生活や、各種の美術や、學問や、宗敎など、それ〴〵に發展史が書かれ得る。實に今日世に歷史と稱するものは、何れも發展史であるのが普通である。さうして近來に至つて益々この發展史の姿が明かとなつて來たといふのは、文化現象に關する科學的理解が進んで、諸般の文化現象を分析し統一して考察する方法が愈明かとなるに從つて、諸般の文化現象の歷史を、系統的にその發展の後を辿つて進むといふことが、出來よいことになつて來たのである。斯くの如くにして今日に於ては文化史なるものが、各方面に分業を立てゝ研究せらるゝこととなつて來た。即ち現に見

る所の文化史に至つて、發展史の歴史記述法が、完成したと言ひ得る。

文化史に於ては、人類がその力によつて自然狀態から遠ざかり行く歴史的の過程を、總て文化の發達だと見る。歴史のある所に文化がある。歴史の發達は即ち文化の發達であると、斯樣に考へるのであるが、其後に豫定せられて居る所のものは、文化なるものが發達するといふことである。否或る種の文化が發展するといふことを、歴史の中心の問題とする。さうして諸般の文化に共通したものがあつて、これを或は精神と呼び、或は理念と呼ぶ。斯かる理念なり精神なりが發展するので、それを中心として文化史が成立し發展すると見るのである。この歴史の觀方といふものは、確かに歴史全體に統一を與へ、歴史の意味といふものに對する相當深い洞察を以て、その發達をあとづけるのであるから、これが科學的には發展史の最も發達した形態となつたのは、理由のあることである。其故我國の歴史の如く、未だ斯くの如き文化史の見地から、よく巧みに說かれたものを見ないのは惜しむべきことである。偶々世に文化史と稱するものは、宗敎とか、藝術とか、文學といふが如き類の、言はゞ高等な文化現象、精神的なる文化現象の歴史に過ぎないのであつて、社會心理學的な文化史と個人心理學的な政治史と對立をせしめた舊い觀察法を誤解して、政治史にあらざるものを文化史と考へたり、即ち政治上の事件は文化史的に考へられぬもの丶如く、極端な誤解をしたり、又は戰爭は文化的ではないと考へて、戰爭の歴史を文化史から省略したりするが如き、極めて幼稚な考へ方すら行はれて居

る。それ故歴史の意味を、自然に對する文化の發展といふ高い見地から眺めたやうな歴史は、勿論我國にもその企てがないではないが、さうして又將來その人の業績を刮目して見るべきものがあるには相違ないが、現在の所では、現代の文明國として他國に誇り得るだけの文化史が、未だ我國に於て書かれて居ないといふことは、これは最も惜しむべきことの一つである。是非ともよく整うた文化史が書かれることを望まざるを得ない。

さて然らば歴史は文化史でよいか、文化史が最も發達した歴史の形態であるかといふに、我國ではまだ見るべき程の文化史が書かれて居ないに拘らず、既に早くも文化史に就ては、その記述法及び歴史の觀方に對して、疑問の挾むべきものがある。前にも言つたやうに、歴史に對する智識の進歩は、事件より沿革に移り、沿革より因果關係に進む。歴史を個々の事件だと見るのは至極幼稚な觀方であつて、稍反省すると、歴史は沿革的なもの、發展するものと考へられる。さうして更にこれを反省すると、歴史は原因あつて生じたる結果であつて、因果關係の產物であると見る。この事は前に述べた所であるが、實に歴史記述法を考へる上に於ても、この事が基本的な考へを導き出だす。又歴史記述法の發達史を見ても、この事が考へ合はされる。即ち先に言へる原始的な『發現史』に於ては、個々の事件なり、事實なりは、その時その時に發現したものである。即ちその時代の人は歴史を個々の事實に就て見た。然るにその次に起つた『發展史』にあつては、歴史は沿革を中心として觀察せられた或

る一個の精神なり、或る一個の文明なりが發展することによつて、歷史が發達すると、斯く考へる。さうしてその最も進步した形態が文化史であつた。そこで勢ひ考へられる所のものは、因果關係を着眼點とした歷史の形態はないかといふことである。從來の所では、歷史は『發展史』にまで進んで、それ以上に進むといふ所にまでは、まだ餘地がある。併しながら歷史の認識が事件より沿革に移り、更に因果關係に進むものならば、同樣に歷史の記述法の發達も、並に觀察法の發達も、『發現史』より『發展史』に進みたるのみでは止まらないで、更に今一步前進すべきものがあるではないか、必ずやその後に來るものがなければならぬ。さうして私は斯くの如き歷史の形態を、今茲に力強く主張せんと欲するのであつて、これを名付けて『成立史』と謂はんと欲する。即ち成立史は因果關係といふ歷史の窮極的な認識の中心問題を最も重んじて、これを基礎にして歷史を觀察し、記述せんとするものであつて、發現史及び發展史に對立して、歷史の觀察及び記述の最後的な、即ち最も進步した形態であると信ずるものである。

四

現代は世界史、並に諸國史の大きな變り目であつて、歷史觀にも大きな變化が現はれて來つゝあるといふことが、前に一言したやうに誰にも氣がつく所であつて、從來の沿革的な發展史的な歷史の觀方といふものが、今や將に根本的に反省せらるべき時期が來たのであると、私は密かに考へて居るの

である。さうしてこの變化の端緒ともいふべきものは、正しく彼の唯物史觀と稱する歴史の觀方に關係して認められると言はねばならぬ。抑々唯物史觀では經濟を基礎として、文化が成立して居ると見る。文化的な意識は經濟に制約せられて居るものと見る。さうして經濟の發達の根柢は生產力の發展にあると見る。即ち生產力の發展を基礎として歴史の發展を說く。經濟の發展を基礎として文化の發展を說く。文化史は要する所、經濟を基礎にして成立したるものなりと說く。文化史を文化史家の如くに、單に或る精神の、又は理念の發展史と見ずして、生產力を基礎にして成立し、發展したるものなりと見る。然るにこのやうな歴史の觀方は、右に述ぶる歴史に對する認識の進步過程より論ずる時は、相當意味深いものであると思ふ。唯物史觀が生產力のみを根柢として歴史を觀るといふ點は、確かに一個の偏見であり獨斷があるから、これを以て科學的に堅實な歴史觀であるといふことは困難であるけれども、併しながら歴史を單に發展史とのみは見ずして、文化的意識成立の基礎といふ點に着目したことは、見逃すべからざるこの歴史觀の長所であつて、その經濟的考察に偏して居るといふ點によつてのみ、これを排斥し去るのには、餘りに重大なる新しき考察方法を、歴史全體に對して試みたものだと言はねばならぬ。

實にこの歴史觀の新しさは、それが私の右に一言した『成立史』の歴史觀の建設に對して、有力なヒントを與へて居る點にある。それ故この點を少しく吟味するが、それは結局する所、此唯物史觀で

は、未だ私の希望するが如き成立史の形態が考へられて居らないといふことになる。抑々先づ經濟的見地からのみ歴史の成立を理解すること、この史觀の如きものが正しきや否やに就ては色々議論もあるが、私は單に其結論に於てのみならず、因果理論の考へ方に於ても、これを正當だとは思はない。物質的方面の極度の偏重、これによつて見逃がされたる人間の精神的活動の、根本的なる無視といふ點は、どうしてもこの史觀の缺陷として數へらるべきものである。假令プロレタリヤ階級の解放のために、この歴史觀が利用せられるにしても、この解放の爲に行はれると言ふ運動そのものが、既に極度に理想主義的であつて、到底單に經濟的事情の爲にのみ促された者だとは言へない。若し一度び勞働者の次の社會が成立して、其の希望の如くに經濟上の欠陷が除去せられる時が來たとしたならば、其の曉には必ずや人間の精神力が強く反省せられるであらうから、精神的方面を無視しない新たなる歴史觀が生れざるを得ないであらうと思ふ。科學的に正しい歴史觀にあつては、唯物史觀とは異り、人間の精神力を正當の位置において認識したものであらねばならぬと思ふ。併し此點は歴史觀の內容であつて、見解は分れ得べきことだからよいとして、問題になるのは、歴史の語る所を以てすれば、唯物史觀は歴史研究の結果立てられた學說ではなくして、歴史研究に先だちマルクスの時代の社會狀勢の下に於て思い付かれた思想である。そして其の考へ方より言へば半ば科學的な見解だが、半ば形而上學的な觀念である。唯物史觀が始めから觀念的に生產力を捉へて之を史觀の基礎として居ること

は、やはりこれはかの氏族や自由の如く始めから定まつた者が發展すると言ふ發展史の形態を脱却しかねたものであつて、成立史の建設に對する大きなヒントにはなるが、此史觀で書かれる歷史では、未だ私の希望せる成立史とはなり得ないものである。成立史の史觀となるが爲には、歷史を根本的に綜合的に考察し、實證的に歸納的に立てられた歷史の因果に關する眞に科學的な史觀であることを要する。そして此かる史觀から見直された歷史が即ち余の言ふ成立史である。此見地よりすれば、唯物史觀は歷史を沿革的なもの、從つて發展的なものと見る古い觀方が根抵となつたものであることが明白である。

發展すべきものは、この歷史觀では生產力であるから、かの國民精神とか、即ち例へば日本の國體とか、大和魂とかいふが如きものではなく、或は自由とか道理とかいふが如き精神的なものとも異つて、物質的なものである。唯物史觀の新しさは、精神的なものが發展すると見ずして、物質的なものが發展すると見た所にあることは、固より疑ひなき事實である。斯樣な新鮮さはあるけれども、生產力といふものを基礎に於て、その發展を論じた所に、この史觀の根本的な立場があつて、其考察方法からすれば形而上學的色彩を帶びた方法によつて、生產力の發展といふことを說く點に於ては、從來の發展史的な歷史觀と、甚だ選ぶ所がないのである。然るに斯くの如き發展史なるものは、歷史認識の理論から見て、尙ほ探究の餘地を殘したものである。即ち發展史よりも一步を進めたる、歷史の形態で

ある成立史といふものが存在し得る。唯物史觀は文化史を成立史的な眼で、見直さんとして居るに拘らず、その根柢に於ては、觀念化された生產力を出發點として居り、發展史が根柢になつた歷史の觀察並に記述法である。發展史より成立史に進まんとするその道程に橫はつて居るものであつて、歷史の正しき硏究法から言ふならば、一個の不安な狀態にあるものである。唯物史觀の論者は、極めて簡潔に現代の社會と文化とを批判するけれども、それは唯物的な態度が確然と定まつて居ると言ふことゝ、經濟現象が科學的正確さを以て理論的に硏究し得ることの結果であつて、若しその唯物的と言ふ歷史の成立的觀方の根柢を探れば、科學的考察に於て純一でない考察の產物である所の生產力といふものを前提にして、發展史的に發史を眺めて居る。決して成立史として完成したものではないのである。

蓋し生產力はそれ自體單純に最後的なものではなくて、人間の精神力が自然物に加はることによつて、初めて成立せるものである。經濟財を生產する行爲は生產力の生ずる所以であるが、それが成立するためには、自然物に對して精神力が加へらるゝことが必要である。然るに人間の精神生活なる者は、物質を追求することにのみ限られてはゐない。肉體の保存のみを目的としてはゐない。原始時代に至る程靈的な威力を怖れるではないか。又古へも今も物質に捉はるゝことなく人間の價値を考へるではないか。又物質を追求し生產する段に於ても、人により民族により精神的能力の相違がある。此

等の事情が皆生産力の成立に關係を有する。唯物史觀は、生産力の發展を基礎として、文化的意識の成立を說くといふけれども、その生産力なるものが、實は既に右の如き精神力と自然物との關係の上に成立したものなのである。それ故に唯物史觀では、生産力を初めから根柢として居る點に、『成立史』としては到底不完全なものを藏して居るのである。この不完全さを脫し切つて、生産力と雖も成立したるものと見て、愈々押詰めて根本的に、歷史成立の根柢にまで進むのでなければ、因果關係を中心とした歷史の認識が完成しないのである。唯物史觀では成立史に對して、一個の有力なヒントを與へたといふのに止まる。吾等はこれを以て滿足することが出來ない。否この程度で滿足するならば、甚だ危險な論斷をやることゝなる。唯物史觀に關し形而上學的だと言ふ批判に就ては、私は別に京都大學史學科の史林第十六卷第三號の中に述べて置いたから、更にこれを詳述しない。要するに唯物史觀に對する正當な批評は、精神的史觀を以てこれに對立せしむるが如きものであつてはならない。さうではなくて、この史觀が『發展史』から『成立史』に移る過渡期にあるものであつて、それ自體の中に、一個の煩悶を有したものであるといふ點にあるのである。それは既に發展史より足を洗はんとして居るに拘らず、尚ほ發展史を脫け去ることが出來ず、成立史を眺めて居るに拘らず、尚ほその根柢である生産力に於ては、成立史的になり切ることが出來なくて、あやふやな所で足を止めて居るものである。この二つの立場の矛盾に足場を置いた唯物史觀から脫却して、更に新鮮な自由な進步した歷

史理解の天地に出づるがためには、吾等は斷然一躍して、『發展史』の正體を見つめ、『成立史』といふ新しき歴史學の形態を明確に認識し、堅實に之を構成してかゝらねばならぬのである。

　これを要するに、歴史の認識の進歩と同樣に、歴史學も亦三段の發達過程を經べきものであり、又實にその初めの二つの段階を經て、第三の最後の段階に入らんとするのが、現代の歴史學、並に歴史觀の實狀なのである。即ち『發現史』最も古く、これに次で『發展史』が起り、これが從來の歴史記述の大部分を支配して、今日に及んだのであるが、今や歴史を因果關係を基礎として見る所の『成立史』に進まんとする所にあるのである。これを圖に示すと次の如くである。

(一) 發現史 ↓
(二) 發展史 ←
(三) 成立史 ↑

この圖によつても明かなる如くに、成立史の觀方は、發現史と丁度逆である。『發現史』の典型的なものは、神話に於て見るべく、そこでは神慮(神の意思)によつて歴史が現はれると見るのであつて、その神慮は仰ぎ窺ふべきものであるけれども、到底人智を以て究明し得べきものではなかつたのである。天上界に在る神の意思が、地上に實現して歴史となる。これに反して『成立史』にありては、歴史を

如何なる因果關係で出來上つたものかと、その理由を人智により實證的に研究することが出來得べきものであつて、窮極する所歷史の本質は、科學的に明かならしむることが出來るものと見るのである。神の意思の如くに不可解なものではないのである。私は先に述べた論文の中に、『發現史』に對應して宗敎的史觀を揭げ、『成立史』に對應して形而上學的史觀を揭げ、さうして『成立史』に就ては科學的史觀を揭げたのであるが、實に歷史に對する科學的研究を徹底せしむる時には、歷史は『成立史』として見られなければならないのである。その初め歷史を神の意思の表現と見て、個々の事實をそれぞれに眺めて居た時代には、歷史の觀方は今日から言へば、勿論極めて皮相的で、表面的な事件のみを見てゐた。諸國の神話を見ると神々の戀愛や旅行や戰爭や事業などに關して、事も細かな敍述がなされてゐるではないか。これは個々の事件を歷史と見たから起つたことである。その次の『發展史』に至れば、歷史の流れと言ふ者に注意を集めることゝなり、歷史が遠望せらるゝことゝなつたので、歷史の概觀なるものが企てられたことは言ふまでもない。併しながらこの時までは、歷史の內幕に入り込むと言ふ段にはならなかつたから、まだどうして歷史が發展するのかといふその根據が考へられて居らないので、歷史の理解は言ふまでもなく不完全であつて、各自專問の立場から外面的な敍述と觀察とが行はれて居る狀態であつた。然るに玆に最後に『成立史』といふ形態が出來上れば、それは『因果關係』を基礎にした觀方であるから、歷史が初めて眞に內面的な理解の上に書き上げられるのである。

五

然るに『因果關係』を中心として歷史を見るといふことは、言ふべくして實はなか〳〵困難なことである。唯物史觀が『成立史』の見地を交へて居るといふことが、甚だ有力なヒントなるけれども、前にも言つた如く、その根柢となれる生產力なるものが、實は旣に原因あつて成立した結果であると言はねばならぬ。私の見る所を以てすれば、歷史は窮極する所、人類と自然との關係によつて成立したものであつて、人類が自然に働きかけると同時に、自然が又人類に働きかける。さうして兩者が相互に影響する。其處に人類の精神力と物質力との關係により、歷史が成立するといふ點は、これは何人も疑ひ得ない所であると信ずる。そこで何が斯くの如き關係の必然的な產物であるかといふことを見極はめて、その基礎の上に文化が成立して行く過程を硏究するといふのが、『成立史』の方法であると考へて居る。所が何がその必然的な歷史の基礎であるかといふ歷史觀に就ては、全歷史に對する根本的な理解によつて、實證的歸納的に結論せらるべき者である。それは恰も生物學に於ける進化論の如くに、發見せらるべきものである。そして歷史現象が複雜なだけ、其原理の發見は自然科學に於けるが如く容易ではないであらうから、幾度も反省し修正されねばなるまいが、歷史の認識の理論と、歷史學の發達とから推して考ふるに、今や『成立史』なる歷史の形態が生れるべき時であることは、必然的にこれを斷言し得べき所である。この種の歷史に於て初めて科學的に徹底した歷史觀が基礎と

なつて、最も發達した歴史が書かれる筈だといふことは、疑ひなき所であると言はねばならぬ。

前にも一言したやうに、歴史の事實は極めて複雜であつて、現在の一個の出來事が、これを煎じ詰むれば、久遠の古へより今に及べる歴史に關係を有し、東西の歴史に聯絡をもつて居る筈のもので、歴史的な研究である以上は、この全體的な關係といふ點を、必ず忘れてはならないのである。全體的な關係に於て見るといふことが、實は歴史的に見るといふことなのである。人動もすれば歴史的な觀方といふことを、沿革的な觀方と考へるのは、彼の發展史的な觀方に捉はれるものであつて、勿論それも歴史的な觀方に相違はないが、それは併し歴史の最も重要な部分ではない。歴史の更に重要な部分は、因果關係を正して見るといふことで、其爲には全體的な判斷を必須の要件とする。眞に因果關係を辿つて見る時に、發展又は沿革といふものゝ本質も亦、始めて明かとなる。そして部分的ではなく全體的に歴史を研究することによつて、因果關係に對する判斷が正當なものとなる。發展史的な觀方に於て免れざりし缺點は、發展するものを、精神的方面とか、物質的方面から、豫め定めてかゝるといふ弊害に陷り易かつたことだ。例へば自由とか、道理とか、生產力とかいふが如きものをきめてかゝつた。所がさうすると既にそれだけ見られた歴史が事實ではなくて、虛構を含むことゝなる。歴史に於て發展するものは、固より斯くの如きものも發展するであらうけれども、眞に發展するものは、實は歴史全體なのである。自然と人類との關係に於て必然的に成立する現象が、それが歴史發展の根

元であつて、實は歴史全體といふものを全體として發展するのと見るのでなければ正しくはない。その中の何か一つを捉へて、歴史は之を中心として發展すると言ふやうに說くといふと、假令其限度に於ては鋭さがあつても、それは所謂側面觀なるもので、まともな觀方ではない。然るに歴史全體が發展するといふことは無意味である。捉へ所がない。そこで科學的に根柢的に全歴史を說かんとする以上は、發展史といふことを言はない。却つて歴史は常に成立したものであるといふ所に着目するのである。吾々が歴史といふ以上は既にそれは成立したものである。成立せざる歴史といふものは勿論考へることが出來ない。その歴史は右に言ふ如く、全歴史的なものゝ發展の產物であるけれども、併し今言ふやうに、斯くの如き發展といふものは、實は自然と人類との關係から必然的に成立したものゝ發展であり、個々の塲合の歴史をとつて考へても、歴史はそれ〳〵に理由あつて成立したものに外ならないのである。その理由あつて——必然的に——成立したといふ點が歴史の生命である。然るにかやうな歴史的成立である所の何かを捉へて、其發展を基礎に歴史を說くのは、一方に偏した不完全な觀方である。科學的に正しく歴史の本質を見るが爲には、何が故にかゝる歴史が成立したかと言ふことを次から次へと原因に溯つて反省すべきである。そして其反省による研究を基礎にして歴史が書かれるときに、其歴史の形體を稱して茲に成立史と言ふのである。かやうな意味で歴史といふものは、科學的には成立史として書き上げられた時に於て、初めて最も高級な歴史が書かれたと言ひ得べきもの

である。されば今後の歴史の形態は成立史であるべく、成立史の原理たるべき歴史觀は自然と人類との關係を、その根本的な必然的な關係に遡つて研究することによつて、堅實に建設せらるべきものである。

歴史研究に於ける私の煩悶は、現在の所右の如き結論に達したことに於て、聊か休まる心地を覺えて居る。個々の事實の考證はそれは史料によつて制限を受けるから、正確を飽くまで期待することは出來ないであらう。複雜なる歴史の諸關係は、飽くまでこれを知り盡すことは出來ないであらう。これは歴史學の性質上免れざる難事である。併しながら歴史の認識の進步の過程と、歴史學の發達の道行きを合せ考へる時に、歴史學が窮極する所、成立史にならなければならない。さうして成立史に於て初めて科學的な歴史研究が完成せられるのであると、斯くの如く考へることによつて、吾等に從來の歴史とは異つた、新らしい歴史研究の天地があると言ふことを見付けた。そして此方法によれば、史料の欠陷から煩はさるゝこと最も少く、又複雜な歴史の諸關係を簡潔な理論によつて整理し得る希望を有し得る。そして歴史が人生に觸れ、文化を明かにしたものとなつて來る。そこで吾等にとつて初めて今までの憂鬱から脫れうる時が來たのだ。吾等は歴史家としてやり甲斐のある仕事が茲にあることを信じ、重き負擔の加はれるを喜び、再び勇氣を奮ひ、前途を目指して進むのである。—了—